

P1-619 子宮または子宮付属器の良性疾患が閉経に及ぼす影響—閉経年齢と脂質プロファイルの推移について—

福井県済生会病院

細川久美子, 里見裕之, 永原健児, 福野直孝, 金嶋光夫, 紙谷尚之

【目的】子宮または子宮付属器の良性疾患が閉経年齢と閉経週期の脂質プロファイル推移にどのような影響を及ぼすかを知る。【方法】平成10年度から同14年度まで毎年度必ず当院健診センターを受診した40歳—55歳(調査開始時)女性のうち、子宮または子宮付属器の手術既往なく、且ついかなるホルモン療法も受けていない条件を満たす357名を対象母集団とした。毎回、問診、身体計測、内診、経膈超音波、血液検査を実施し、これらのデータをもとに、閉経時期を医学的に推定する。母集団を有疾患群(子宮筋腫、子宮腺筋症、子宮内膜症、卵巣良性腫瘍、のいずれか疾患ありと診断された者=144名)と対照群(前者以外=213名)の二群にわけ、閉経年齢を比較した。次に母集団から調査期間中に閉経したと診断される94名(調査期間中閉経集団)を抽出、母集団と同様二群にわけ、閉経時をゼロとした年齢別に血清脂質値を集計した。【成績】母集団の調査最終年度50%閉経年齢は、対照群で51.38歳、有疾患群で52.63歳、であり、有疾患群で非閉経率が有意に高かった(Odds比=2.47)。調査期間中閉経集団において、閉経-3歳から+4歳までの総コレステロール値とLDLコレステロール値の変動は、対照群でそれぞれ、197.0→220.0(mg/dl)、122.6→141.4(mg/dl)、であった。これに対し、有疾患群ではそれぞれ、180.7→237.8(mg/dl)、110.5→162.8(mg/dl)、とより顕著な増加を示した。中性脂肪値は有疾患群で増加したが、HDLコレステロール値は両群とも有意に変動しなかった。【結論】未治療の子宮または子宮付属器良性疾患が存在すると閉経が遅れ、閉経週期の脂質プロファイル推移が増悪する。

P1-620 加齢や閉経による身体各部位の体組織成分(脂肪率)の変化に関する研究

鹿児島大

河村幸枝, 米原幸愛, 桑波田知樹, 東洋一, 岩元一朗, 堂地 勉

【目的】体脂肪蓄積の絶対量(肥満度)よりも蓄積部位の異常(体脂肪分布異常)が、動脈硬化、高血圧、糖尿病、高脂血症などの内分泌代謝疾患(Metabolic症候群)の発生と関連して重要であることが示されている。しかし、身体各部位の体組織成分(筋肉と脂肪組織の組成)が加齢や閉経によりどのように変化するかは必ずしも明確でない。そこで次のような検討を行った。【方法】対象はICの得られた右利きの413例の有経女性(20—53歳)と229例の閉経女性(50—75歳)である。年齢、身長、体重、BMI、閉経年齢、閉経後年数(YSM)を調査した。上肢、躯幹、下肢、全身の脂肪量と筋肉量をDEXA(QDR 2000)で測定して、それぞれの部位での脂肪率(%)と躯幹/下肢脂肪量(体脂肪分布)を求めた。【成績】1)上肢と躯幹の脂肪率は両群とも年齢と正の相関を示し、閉経群で有意に高かった(左上肢:49% VS 46%, 躯幹:32% VS 25%)。2)躯幹/下肢脂肪量は両群とも同じように年齢と正の相関を示し、閉経群で有意に高かった(1.33 VS 0.93)。3)下肢の脂肪量と筋肉量は両群とも同じように年齢とともに減少したため、脂肪率には全く差がなかった(38% VS 38%)。4)50—53歳の有経女性(n=52)と年齢を一致させた閉経女性(n=43, YSM=2.8±1.8)では、いずれの部位の脂肪率にも差はなかった。さらに、躯幹/下肢脂肪量にも全く差はなかった(1.1 VS 1.1)。【結論】躯幹と上肢の脂肪率の増加には閉経よりも加齢が関与する。下肢の脂肪率は加齢や閉経でも変化しないことが明らかとなった。故に、閉経女性における上半身型体脂肪分布への移行には、閉経よりも加齢が関与しているといえる。

P1-621 BMIは年齢と相関するか?

日本医大

金 栄淳, 佐藤杏月, 中井晶子, 吉田有里, 坊 裕美, 西田直子, 松島 隆, 小西英喜, 可世木久幸, 朝倉啓文, 竹下俊行

【目的】閉経以降、E₂は減少し高脂血症に傾く。また高脂血症は肥満と関連する。しかしこれまでBMIと年齢の相関分析はなされていないので今回検討を行った。【方法】女性外来通院中の1033症例(年齢の範囲:14—88歳、年齢の平均と標準偏差:45.9 ± 14.0)を対象とした。上記対象についてBMI、E₂、血中総コレステロール(T-C)、LDLコレステロール(LDL-C)、HDLコレステロール(HDL-C)、中性脂肪(TG)、レプチン、および尿中NTxクレアチニン補正值(NTx/Cre)を測定し、年齢との相関分析を行った。研究施行に際しては全症例からインフォームドコンセントを得た。さらに若年者については両親の同意を得た。【成績】E₂は年齢に対して有意の負相関(r=-0.30, p=3.33 x 10⁻¹⁹)を示した。年齢と有意の正相関を示したものはT-C(r=0.32, p=2.71 x 10⁻⁹)、LDL-C(r=0.30, p=6.00 x 10⁻⁶)、BMI(r=0.16, p=2.97 x 10⁻⁴)、レプチン(r=0.19, p=7.9 x 10⁻³)、NTx/Cre(r=0.16, p=4.66 x 10⁻³)であった。一方、HDL-C(r=-0.04, p=0.5548)、TG(r=0.07, p=0.219)は年齢に対して相関を示さなかった。【結論】加齢と共にE₂は著しく減少し高脂血症に陥り肥満傾向となる。その結果、肥満遺伝子産生蛋白レプチンが増加する。さらにE₂の減少は骨密度低下と低身長化を招く。この結果、加齢と共に肥満度は増加する。